

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆書	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
台	タイ タイイ うてな								最澄
臺	②								聖武天皇雜集
臺	③								豊替指歸
只	シ ただ								豊替指歸
叩	コウ たたき たく								瑞玉集
吋	インチ								
各	カク おのおの								杜家立成
吉	キチ キツ よい								聖武天皇雜集
吉									

【台】「台」と「臺・臺」とは元々は別字。漱石は「墓所」、「屋臺」、「舞臺」など一貫して「臺」を用いる。太宰は「屋台」など「台」を用いている。文部省活字に「台」が無い。

【叩】大徐にない。篆書は「扌」で代用する。隷書では旁が「卩」。

【各】古代は「彳」や「辵」が加わった字体もあったようだ。【吉】「吉」いわゆる「さむらいよし」と、「吉」いわゆる「つちよし」問題。古代はどちらでも良いらしい。大徐篆文がたまたま「吉」だったために「吉」が正字になった。漢代の隷書以降は「吉」が圧倒的に多い。五経文字は大徐篆文に倣っ

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
台	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台	台
臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺	臺
只	只	只	只	只	只	只	只	只	只	只	只	只
叩	叩	叩	叩	叩	叩	叩	叩	叩	叩	叩	叩	叩
吋	吋	吋	吋	吋	吋	吋	吋	吋	吋	吋	吋	吋
各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各	各
吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉

て「吉」だが親字としての掲載はなく、他の字の説明中にある。日本でも「吉」が圧倒的。江戸時代は使用例が少ないが「吉」も現れる。弘道軒には「吉」「吉」の両方がある。漱石は「吉」「吉」の両方を使っている。太宰は「吉」しか使っておらず、正字や明朝活字の影響を見てとれる。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆書	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
吃	キツ どもる								
吸	キユウ すう								
叫	キョウ さけぶ								
向	コウ むかう むける むこう まきに むき								
后	コウ きさき きみ								
合	カウ カウ カウ あわす あわせる								
吊	テウ つり つる つるす								
弔	テウ とむらう つる								

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												吃 現代中国
												吸 現代中国
												叫 現代中国
												向 現代中国
												后 現代中国
												合 現代中国
												吊 現代中国
												弔 現代中国

【吃】康熙字典では「口」部の4画。

【叫】大徐では「誦也(呼ぶなり)」としているが、別に「大誦也」とする字が言部にある。手書きでは旁を「叫」に作る事が多い。口部の3画だが康熙字典も現代中国も2画。

【向】上部は「宀」になるはずの字だったようである。

【后】『漢語大字典』に「甲骨文「后」字即「毓(育)」字、像婦女産子形」とある。『陸軍幼年学校用字便覧』は「後」の許容字体として掲載され、「實ハ別字」と説明がある。

【吊】干禄字書、康熙字典ともに「吊」は「弔」の俗字としている。『陸軍幼年学校用字便覧』は「實ハ別字」としている。

字体の変遷をみるかぎり、「吊」と「弔」は異体字と見て良いだろう。江戸期は「弔」を「つる」、「とむらひ」、「吊ひ」を「とむらひ」、「とむらひ」と読むなど意味は分かれていない。『陸軍幼年学校用字便覧』(大正3年編纂、昭和13年改訂)では「吊」を「弔」の許容字体として扱っているから、意味

は分かれていないと見るべき。太宰は昭和23年発表の『人間失格』で「吊」と「弔」を明確に使いつけている。意味が分かれたのは、昭和13年から23年の間か。現代中国では「吊」と「弔」は「吊」に統合されているようだ。間に草書を介すると「弔」から「吊」ができた過程が理解できる。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆家	隸書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
吐	トはく 常①		吐	吐			吐吐		吐 王勃詩序
							吐吐		吐 王勃詩序
							吐吐		吐 王勃詩序
同	ドウ おなじ 教2常①	同	同	同	同	同	同	同	同 王勃詩序
									同 王勃詩序
									同 王勃詩序
名	メイ ミョウ な 教1常①	名	名	名	名	名	名	名	名 王勃詩序
									名 王勃詩序
									名 王勃詩序
吏	リ 常①	吏	吏	吏	吏	吏	吏	吏	吏 王勃詩序
									吏 王勃詩序
含	ガン ふくむ ふくめる 常①	含	含	含	含	含	含	含	含 王勃詩序
							含		含 王勃詩序
							含		含 王勃詩序
							含		含 王勃詩序

【名】曹全碑の「夕」は一画多い。

平安中期 から 室町	江戸版本 1716年 部首・画数	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
吐	吐	吐	吐	吐			吐	吐	吐	吐		吐 現代中国
同	同	同	同	同	同		同	同	同	同		同 現代中国
名	名	名	名	名			名	名	名	名		名 現代中国
吏	吏	吏	吏	吏			吏	吏	吏	吏		吏 現代中国
含	含	含	含	含	含		含	含	含	含		含 現代中国

※当用漢字字体表の下の○×は、複数の字体がある字種のうち昭和24年当時、岩田母型製造所での母型の有無を示す。

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆書	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期				
吟	ギン 常①		吟 大徐・口部	吟 馬王堆		吟 李女曹娥碑	吟 王居士塔塔銘	吟 江戸五経・説明	吟 鄭警指歸				
			吟 大徐或体					吟 江戸五経・口部					
			吟 大徐或体										
			吟 大徐・口部										
君	クン きみ 教3 常①	君 甲骨	君 金文	君 侯馬盟書	君 大徐・口部	君 馬王堆	君 禮器碑	君 十七帖	君 興福寺斷碑	君 鄭義下碑	君 皇南庭碑	君 五経・口部	君 聖武天皇集
		君 金文	君 侯馬盟書	君 睡虎地秦簡	君 大徐古文	君 ニヤ漢簡	君 鄭黑葛誌	君 李良葛誌					
		君 金文	君 侯馬盟書	君 包山楚簡									
		君 金文	君 侯馬盟書										
吳	ゴ くれ れる 常①	吳 甲骨	吳 金文	吳 包山楚簡	吳 大徐・欠部	吳 馬王堆	吳 居延漢簡	吳 十七帖	吳 孫秋生造像	吳 温彦博碑		吳 王勃詩序	
吳		吳 金文	吳 大徐古文	吳 馬王堆	吳 居延漢簡	吳 檀資葛誌	吳 孟法師碑	吳 魏玉集					
吳		吳 侯馬盟書		吳 馬王堆	吳 魯峻碑								
				吳 銀雀山竹簡	吳 熹平石經								
吾	ゴ われ 人①	吾 甲骨	吾 金文	吾 石鼓文	吾 大徐・口部	吾 馬王堆	吾 武威漢簡	吾 十七帖	吾 帛比下墓文	吾 皇南庭碑	吾 五経・序	吾 王勃詩序	
		吾 毛公鼎	吾 金文	吾 睡虎地秦簡	吾 馬王堆	吾 尹宙碑	吾 争乱帖					吾 鄭警指歸	

【吟】大徐本の或体に偏が「音」に従う字と、「言」に従う字があるが、段注本では「言」に従う字が省かれている。旁が「金」の異体字が馬王堆にあり、五経文字に掲載され、康熙字典では古文としている。「今」と「金」は音が似ているので仮借かもしれない。

【吳】大徐本では「姓也」、段注本では「大言也」とある。【吾】石鼓文の字体は特異。「十七帖」と「争乱帖」では草書の崩し方(筆順)が異なる。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
吟 関戸本朗詠	吟 算法地方大成	吟 口4	吟				吟	吟	吟	吟		吟 現代中国
吟 墨流本朗詠	吟 和漢対照書札	吟 古文										
吟 尊円親王												
君 元暦萬葉①	君 節用	君 口4	君	君	君		君	君	君	君		君 現代中国
		君 古文										
		君 古文										
吳 粘葉本朗詠	吳 日本永代蔵	吳 口4	吳	吳	吳		吳	吳	吳	吳		吳 現代中国
吳 墨流本朗詠		吳 口4	吳	吳	吳		吳					吳 中国繁体
		吳 俗										
吾 粘葉本朗詠	吾 節用	吾 口4	吾	吾	吾		吾	吾	吾	吾		吾 戦国・包山楚簡 現代中国
吾 粘葉本朗詠	吾 節用											

親字	音訓	甲骨文・金文・古文 (殷・西周・春秋・戦国)	説文解字 篆書	隷書 (秦・前漢・後漢)	草書	行書	楷書 (南北朝から初唐)	正字体 楷書	日本上代 から 平安初期
告	コク つける								教4 常①
告									
吹	スイ ふく								常①
吹									
呈	テイ								常①
呈									
呑	ドン のむ								①
呑									人③
否	ヒ いな								教6 常①
否									
吻	フン								人①

【吹】大徐の口部には「嘘也从口从欠」、欠部には「出气也从欠从口」とある。別字でありながら字体が衝突した例か。
 【呈】「呈」と「呈」は異体字。大徐に従えば「呈」が正字体。唐代の正字体は見えないが、康熙字典では「呈」を採用。慣用字体の中国での使用例は「呈」が優勢だが、日本では「呈」

が優勢。これは上代に伝わった字体が「呈」だったからではないだろうか。明朝体の字体は康熙字典以来、正字体の「呈」だが下部が「ノ+土」のものとして「ノ+土」のものがある。中国が俗体と思われる字体を採用している。なお、『陸軍幼年学校用字便覧』では「呈」と「呈」を「實は別字」とする。

平安中期 から 室町	江戸版本	康熙字典 1716年 部首・画数	弘道軒 四号	夏目漱石 坊っちゃん 明治39年	通字体活字 明治41~ 大正3年	漢字 整理案 大正8年	文部省 活字 昭和10年	当用 漢字表 昭和21年	太宰治 人間失格 昭和23年	当用漢字 字体表 昭和24年	教育漢字 平成4年	参考
												告 現代中国
												吹 現代中国
												呈 現代中国
												呑 現代中国
												否 現代中国
												吻 現代中国

【呑】「呑」と「呑」は異体字。大徐も、中国や日本の慣用字体もほとんど「呑」を使っているが、使われていない「呑」がJIS第一水準に「呑」が第三水準にある。人名に使えるのは人名用漢字の「呑」で、「呑」はJIS第一水準ではあるが、常用漢字でも人名用漢字でもないので人名には使えない。

【否】大徐の口部と不部に同じ字体が載っている。どちらも「不也」と意味は同じ。
 【吻】大徐の大徐本と段注本では或体の字体が異なる。康熙字典の古文の字体は段注本と合致する。